

1歳代の言語発達

— 1歳0か月から1歳11か月の表出語彙 —

藤原 雅子 今給黎 禎子 安川 千代 松山 光生
飯干 紀代子 山田 弘幸 笠井 新一郎 倉内 紀子

Vocabulary Development in Children aged 12-23 Month

Masako FUJIWARA Teiko IMAKIIRE Chiyo YASUKAWA Mitsuo MATSUYAMA
Kiyoko IIBOSHI Hiroyuki YAMADA Shinichiro KASAI Noriko KURAUCHI

Abstract

A vocabulary is used as one of the indexes of the language development, and it is important meaning to grasping vocabulary development.

But, there is a little research that a vocabulary in the 12-23 Month was investigated.

The purpose of this study is to investigate the vocabulary of the child in the 12-23 Month. We analyzed it about the number of average vocabularies, the part of speech structure, the difference in sex.

The results is following there were two stages in the vocabulary development as that result.

There were many nouns, and it was the result that preceding research was supported with a part of speech. A noun could be thought to occupy an important position in the early vocabulary development. It guessed the matter that it increased after a 24 month. A difference in sex became clearer than a 22 month.

From now on, the vocabulary which becomes the index of the development evaluation, and the number of vocabularies will be examined.

Key words : vocabulary development , word explosion , part of speech , sexual difference

キーワード : 語彙発達, 語彙の爆発的増加, 品詞, 性差

I. はじめに

子どもは1歳頃より歩き始め、ことばを話し始める。この大きな出来事は、子ども自身にとっても周囲の大人にとっても、また、言語発達の見点からも非常に重要な意味を持つ。子どもはどのようにことばを獲得していくかという議論の中、語彙獲得の研究は活況を呈している(小林, 1997)。

獲得する順序からいえば、理解語彙の方が早い、比較的初期の段階の理解語彙量を測定する適当な方法はなく、子どもがどれくらいの語彙を持っているのかという研究の対象となっているのは表出語彙である(福沢, 1970)。

縦断的方法による語彙の調査としては、大久保(1984)の自らの子どもを対象とした語彙発達についての報告が代表的である。より組織的な研究としてはNHKによる、4人の幼児の0歳から5歳までのことばを記録したものを、各種専門家の検討を経てまとめられたものがある(岩淵ら, 1976)。この種の研究は幼児がことばを学習していく一般的法則を明らかにしようとするものである。

一方、横断的方法は愛育研究所のものが代表的である(柚木, 1997)。この種の調査研究は幼児がことばをどのように獲得していくか、どういったことばをもっているのかといった、いわば幼児言語の一般的傾向を究明しようとするものである。

語彙の先行研究で議論されるのは語彙数・品詞別語彙数・性差である。これらは正常発達の子どもの傾向を知る資料であると同時に、言語発達障害のリスクを持つ子どもたちを見いだす指標であり、障害を持つ子どもに言語療法を始める際の手がかりでもある。

言語・コミュニケーションの発達は1歳6か月児健診における評価ポイントの1つであり、その指標として語彙は用いられる。岩本ら(2000)は、健診や発達相談の実施において、評価のための時間が確保できないことや、子どもの語彙発達を評価する指標がない点を指摘し、2歳児相談でスクリーニングとして使用できる語彙チェックリストの作成を行っている。これらのことをふまえると1歳代の語彙発達を把握し、語彙数や増加特徴について検討することは発達健診への応用を検討する際、重要な意味を持つと考えられる。

そこで、本研究では1歳0か月から1歳11か月の子どもの表出語彙を調査し、各年齢における平均表出語彙数と、品詞構造、性差を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 対象および調査方法

K県下の保育所に通所している1歳0か月から1歳11か月児の養育者、377名に語彙チェックリストへの記入を依頼した。

チェックリストは無記名で、基礎情報として対象児の年齢、生年月日、性別を記載してもらった。

記載不備などにより使用できなかったものを除いた310名分(男児150名、女児160名)を集計し、分析を行った。

2. チェックリストの内容

調査で用いたチェックリストは品詞として名詞176語、動詞123語の他、代名詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞などを含む、全語彙数452語であった。ただし、1歳0か月から1歳7か月児では、同チェックリストの短縮版(80語)を使用した。

3. 結果の分析

先行研究では語彙数に個人差が非常に大きく、平均値と標準偏差がほぼ同値になる年齢もあり、平均値は代表値としての意味が小さいが、多くは代表値として平均値を用いているため、本研究でも比較のために平均値で算出し、範囲を併記することとした。

語彙数に関しては各年齢における平均表出語彙数を算出した。また、年齢と語彙数との相関を求め、増加パターンを分析した。

品詞別語彙数は、名詞と動詞について各年齢における平均値と総語彙に占める割合を算出した。

性差については男女別に各年齢の平均語彙数と品詞別語彙数を算出し分析を行った。

III. 結果

1. 対象児の年齢分布(表1)

対象児数は、最も人数の少ない年齢が1歳0か月の19名で、最も多い年齢は1歳7か月の35名であった。生活年齢間に人数の差はみられるが、おおよそ20~30名であった。

男女別に人数構成を見ると、最も差があったのは1歳4か月の男児14名、女児7名であった。1歳8か月は男女同数であり、他の年齢もほぼ同人数であった。

2. 語彙数の年齢推移

養育者がチェックリストで子どもが表出していると回答した語彙について、各年齢の平均語彙数を算出した(図1):

1歳0か月の表出されている語彙数の範囲は0語～10語、平均値 2.9 ± 2.4 語であった。1歳6か月の表出されている語彙数の範囲は6語～59語、平均値21語 ± 12.9 語であった。1歳11か月の表出されている語彙数の範囲は11語～424語、平均値110語 ± 100.2 語であった。1歳8か月以降は、非常に個人差が大きかった。

平均語彙数が10語を超えたのは1歳5か月、30語を超えたのは1歳7か月であった。1歳6か月以降は急速に語彙が増え、1歳6か月から1歳7か月にかけては21語から32語、1歳7か月から1歳8か月にかけては32語から59.3語へと、倍近くの語彙増加を示した。その後も1歳9か月では60.8語、1歳10か月で94.6語、1歳11か月では110語と年齢とともにその語彙数は増加しており、年齢と語彙数の相関は高かった($r = 0.844$)。

増加特徴としては1歳0か月から1歳4か月までは増加傾向は見られないが、1歳5か月頃から語彙数は増えはじめ、1歳6か月以降の語彙数は右上がりのグラフを示した。

3. 品詞別語彙数

チェックリストには名詞・動詞・代名詞・形容詞などの品詞が含まれていたが、先行研究(小椋, 1999)では名詞優位か動詞優位かといった議論がなされてい

たため、今回、名詞と動詞に焦点を当てその増加傾向を分析した(図2)。

1) 名詞の表出語彙数および割合

1歳0か月から1歳6か月は語彙のほとんどが名詞であった。名詞の語彙数は年齢とともに増加しているが、1歳7か月以降は徐々に他の品詞が増え、全体に占める割合としては他の品詞より明らかに高いが、名詞の割合は減少していた。1歳7か月は語彙数19.9語で62.2%、1歳8か月は35.7語で59.7%、1歳9か月は34.9語で57.4%、1歳10か月は50.6語で53.5%、1歳11か月は56.6語で51.5%であった。

表1 調査対象児の年齢分布

生活年齢	男	女	合計
1:0	9	10	19
1:1	10	11	21
1:2	9	13	22
1:3	11	16	27
1:4	14	7	21
1:5	12	16	28
1:6	15	17	32
1:7	17	18	35
1:8	12	12	24
1:9	17	13	30
1:10	15	14	29
1:11	9	13	22
合計	150	160	310

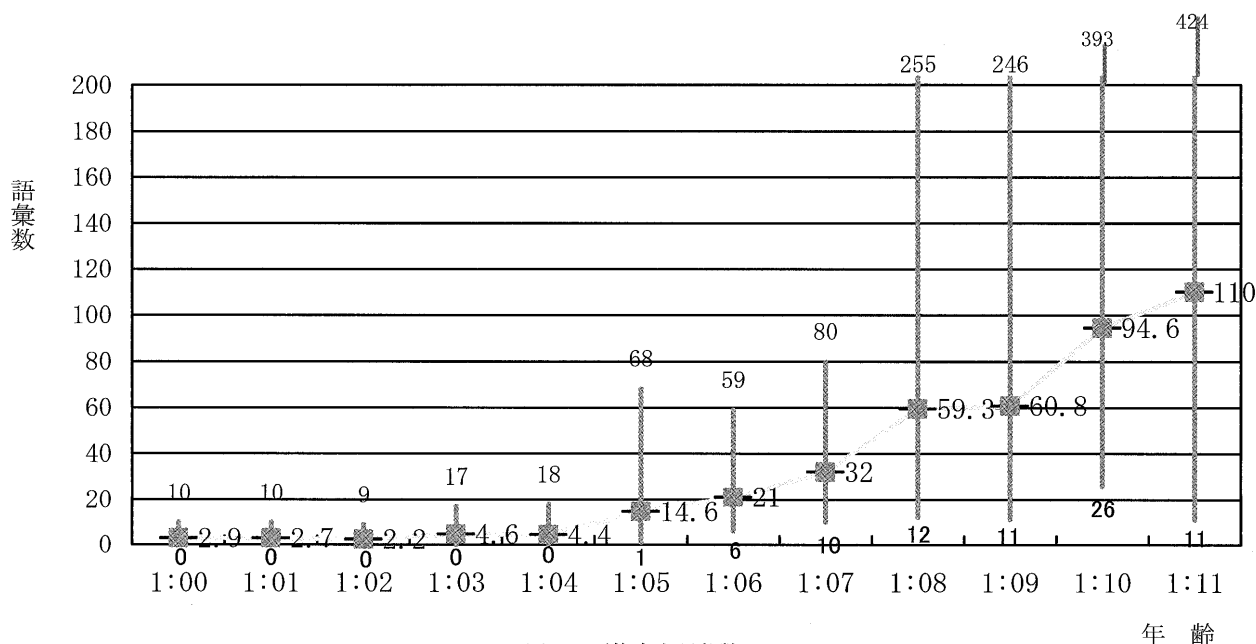


図1 平均表出語彙数

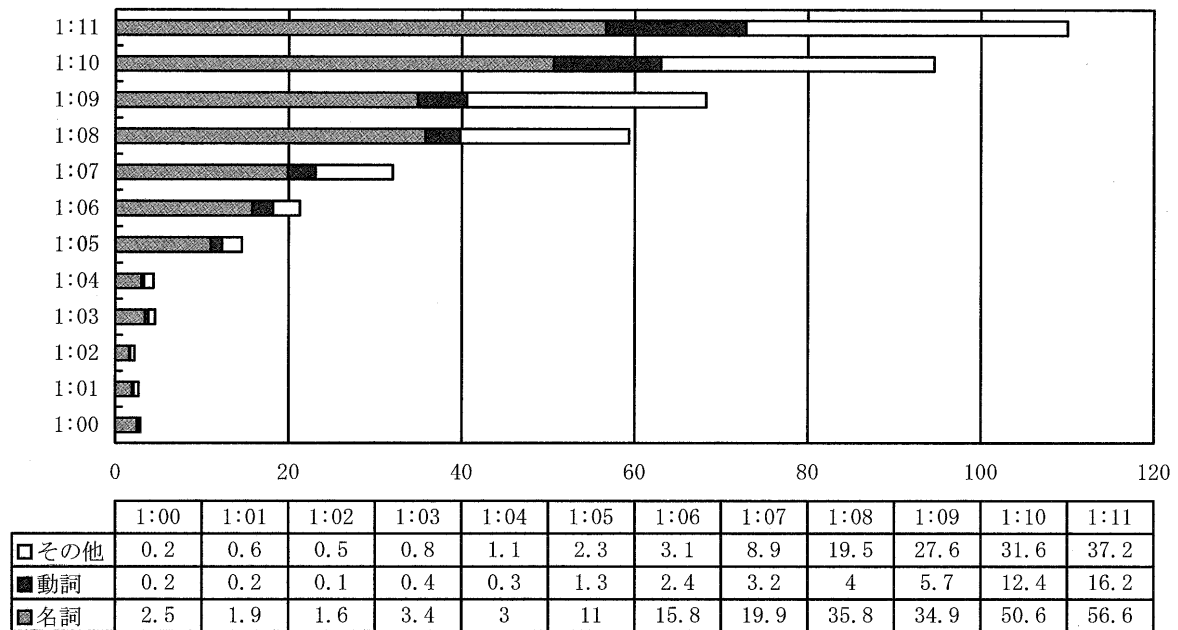


図2

2) 動詞の語彙数および割合

動詞の平均語彙数が1語を超えるのは1歳5か月であり、その後ひと月平均1語の増加を示す。名詞と比較すると、語彙数・割合ともに少ないが動詞は、年齢をおうごとに増加していた。

動詞の割合の変化を見ると1歳7か月は3.2語で10.1%，1歳8か月は4語で6.7%，1歳9か月は5.6語で9.4%と横ばいであった。1歳10か月になると12.5語で13.1%，1歳11か月は16.2語で14.7%であった。

4. 語彙獲得における性差

男女別の平均語彙数を算出し、名詞・動詞の語彙数と全体に占める割合を算出した。

語彙数は、1歳0か月で男児3.2語、女児2.5語、1歳5か月では男児9.9語、女児18.3語、1歳9か月では男児58.1語、女児64.5語とであった。若干女児の語彙数が多いが、1歳9か月まではほぼ同数であり、その増加数もほぼ同じである。しかし、1歳10か月になると男児の語彙数は63.7語であるのに対し、女児は127.6語、1歳11か月では、男児61語、女児144語と、倍以上の語彙を獲得していた。各年齢においてt検定を行ったところ、1歳0か月から1歳9か月までは有意差は認められなかったが、1歳10か月 (t 値=-2.2, $df=14.8$, $P<0.05$)と1歳11か月 (t 値=-2.2, $df=19.1$, $P<0.05$)は5%水準で有意に女児の語彙数が

多かった。

1) 男児の特徴

語彙数は1歳0か月から1歳7か月までは数語ずつの増加であるが、1歳7か月から1歳8か月にかけて19.9語から50.9語へと倍近くの増加を示す。しかし、その後1歳8か月から1歳11か月にかけては再び数語ずつの増加である。

語彙数に占める名詞の割合を見ると、1歳0か月から1歳7か月までは語彙の70%以上が名詞である。1歳7か月から1歳8か月の語彙数の増加とともに、その割合は70.9%から65.4%へと減少する。その後、1歳9か月以降は50%台であった。

動詞についてみると、語彙数の平均値が1語を超えるのは1歳6か月である。

全体に占める割合は1歳0か月から1歳11か月全において10%前後であり、割合の変化は認められなかった(図3)。

2) 女児の特徴

語彙数は、1歳6か月頃まで男児同様数語ずつの増加である。しかし、1歳6か月を過ぎた頃から徐々にひと月の獲得数は増え1歳9か月から1歳10か月にかけては64.5語から127.6語へ、1歳10か月から1歳11か月にかけては127.6語から144語へと急激に増加している。

名詞の語彙数は年齢を追うごとに増加しているが、1歳7か月以降他の品詞の増加に伴い語彙に占

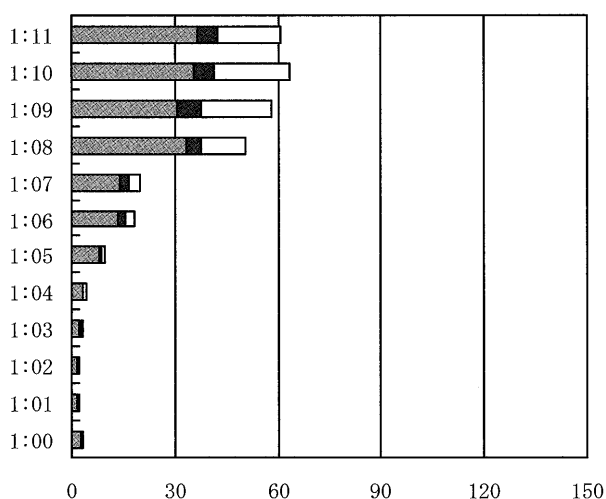


図3 男児品詞別語彙数

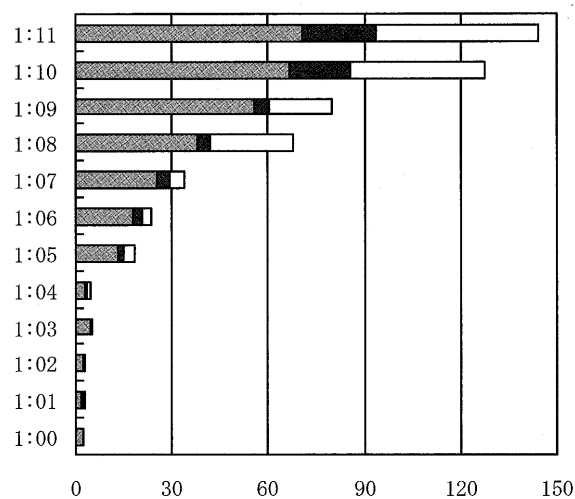


図4 女児品詞別語彙数

める割合は減少を始める。それまでは70%以上を占めていたものが1歳8か月には56.4%へと減少する。1歳11か月では50%を切り、48.5%となった。

動詞については、語彙数の平均値が1語を超えるのは1歳5か月で、男児より1か月早かった。全体に占める割合は1歳9か月までは男児同様10%前後である。しかし、1歳10か月で10.3%、1歳11か月で16.0%と増加の傾向が見られた。1歳10か月以降というのは女児の語彙数が急増する時期と一致していた(図4)。

IV. 考察

1. 語彙数の年齢推移

語彙数と年齢の相関は高かったが、語彙の増加は各年齢で一様ではなかった。1歳0か月から1歳5か月までの語彙数は2語～14語であり、増加傾向はなく、獲得速度がゆっくりであるという特徴を示す結果であった。

1歳6か月以降は語彙獲得の速度は増し、爆発的増加がおこるといった特徴を示した(図1)。

語彙獲得には一般的に2つの段階があるとされている(小林, 1997)。語彙獲得の第一段階は、年齢的には生後10か月から1歳5か月ぐらにあたり、初語の出現前の言語理解を示す行動を見せ始めたところから、30～50語ぐらいまでの語を産出するようになったころまでと見なされる。この時期の特徴として、獲得速度が比較的ゆっくりであること、特定の一語を通常の使用範囲を超えて使用すること(語の般用)があげられる。

語彙獲得の第二段階は年齢的には1歳6か月以降であり、自発的に産出できることばが50語を超えるころである。一般にいう「語彙の爆発的増加期」である。この時期の特徴は、語彙数の伸びが顕著となること、語の般用が新たな語彙を獲得することで減退していくこと、獲得語彙の構成要素が変化することがあげられる。

今回の結果でも、語彙獲得には第一段階1歳0か月から1歳5か月まで、第二段階1歳6か月以降があり、先行研究を支持する結果であった。

語彙数の先行研究をみると、研究者間でかなり異なるため、確定的な数を示すのは難しいものの、1歳6か月で30～50語、2歳までに200～300語前後といわれている(小椋ら, 1998)。その語彙数に比べると今回は1歳6か月で21語、1歳11か月で110語と全体的に少ない結果であった。今回の結果は若干少ない語彙数を示しているが、これは先行研究(大久保, 1984)では1児、もしくは少数の子どもを縦断的に観察して表出語彙をカウントしていく方法をとったこと、また、多くはビデオ録画という表出語意を確実にとらえる方法をとったことが関係していると考えられる。本調査では質問紙形式のチェックリストを用いたため、用意した語彙類に回答される語彙が影響される、親の意識または記憶の範囲のことしか知り得ない、得られた結果を確認することができないといった質問紙法という研究方法の特徴と制限が加わったと考えられる。しかし、質問紙法を用いたことによって多数のものについて、比較的統制された一様な資料を採集できること、能率的に資料採取ができることといった利点もあったと考えられる。

縦断的方法は少数例についての事例研究であり、そこから各年齢における語彙発達の一般的、普遍的特性を導き出すには、その事例の特殊性を考慮した慎重な推論が必要である(柏木, 1978)。その意味で、本調査は横断的方法をとったことにより、短期間で多数の資料を収集することができ、統計処理が可能で、語彙発達の指標を検討するには適していたと考えられる。

2. 品詞別語彙数

早期獲得語の表出で名詞が高い比率であることはさまざまな子どもの観察や質問紙調査(岩本ら, 2000)で見いだされてきた。小椋ら(1999)の調査においても早期表出語彙の品詞カテゴリの中で、名詞の占める割合は42%であり、他の品詞と比較すると圧倒的に多い。一方動詞については、1歳10か月以降わずかな上昇は見られたが、1歳代においては語彙に占める割合は低かった。

本研究においても1歳0か月から1歳11か月の、名詞と動詞の表出語彙数の平均、全体の表出語彙数に占める割合ともに、名詞が動詞より優位になることはあったが、逆に動詞が名詞に比べ優位になる年齢はなく、多くの先行研究を支持する結果であった。これらのことより、1歳代は名詞優位であると考えられ、名詞が初期の語彙発達において非常に重要な位置を占めているといえる。

言語段階と名詞、動詞の関係を見ると、動詞を使用するようになった子どもの言語発達段階は、統語段階以上であるといわれている。

塩見ら(2000)は動詞について2歳0か月から2歳6か月の間に飛躍的に獲得される可能性を見出している。その要因としては2歳以前に名詞などの語彙数が増加することにより語が連続して出現することが多くなること、さらに2歳半ばになると文と文をつなげることが可能になることが考えられるとしている。動詞の獲得には単語から構文(2語文)への発達の移行が含まれており、動詞の獲得は構文的機能の獲得につながるがいえる。いいかえれば動詞獲得が構文獲得を含み持っていると考えられることもできる。

本調査は1歳0か月から1歳11か月を対象としており、2歳以降の結果と比較することはできないが、動詞の増加に変化が見られる時期は1歳10か月以降であった。語彙のみを対象とした質問紙であったため、子どもの語連鎖の表出を把握できていないが、語連鎖の前段階として動詞の増加があることが推測された。

Gentter(1982)は、英語、ドイツ語、日本語、カ

ルリ語、標準中国語、トルコ語の6カ国の子ども16名のデータを提出し、初期の子どもの語彙で名詞が優位であるのは普遍的な現象であると報告している。名詞は他のカテゴリと比べ、より単純で、より基本的な“具体的概念”であるため、獲得しやすいとしている。

一方動詞は“活動、状況の変化、因果関係のような叙述的概念”であり、名詞類より変動しやすい。そのため、子どもはその語彙がどのような活動、状況を表わすのかを発見しなければならない。その点で、名詞類より獲得が難しいとされている。

子どもは周囲のものを指して命名を求める段階を経て、2歳頃になると、語彙構造が変化し、名詞だけではなく、動詞・形容詞など状態を表わす語彙類が徐々に増加する(大石, 2001)。本調査で語彙の品詞構造に変化が見られ始めたのは1歳7か月であり、語彙の爆発的増加期以降であった。語彙の爆発的増加は、子どもの認知や他者認識の発達など、様々な発達が関連して生じる現象であるといわれており、言語獲得の前提となる認知の発達が探られている。このことから、語彙の爆発的増加期には何らかの認知的発達の変化も起こっていることが推測され、そのことが品詞構造の変化をもたらすと考えられた(小山, 1999)。

3. 性差

国、調査方法、分析方法、言語指標の違いはあるが、先行研究(小椋, 1999)において女兒は男児に比べ優位であると報告されている。一方、性差は育児スタイルの標準化、単一化の移行に伴い、実際にはあまり無いとする研究者もいる(Templin, 1957)。また、性差は獲得のスタイルよりも、速度にあるがほとんど有意な差でなく、一貫してどちらが優位ともいえないともいわれている。しかし、性差があるとする先行研究においても、いつの年齢より差が明らかになるのかといったことについての詳細に述べているものは少ない。

性差の有無は対象とする年齢によっても異なると考えられるが、本調査が対象とする1歳0か月から1歳11か月においては全年齢、語彙数において女兒優位の傾向が認められ、さらに1歳10か月および1歳11か月では5%水準で女兒の語彙が有意に多かった。

女兒優位への回答として、大脳半球の側成化に性差があり、言語、空間機能は女性の脳で広く分布しているが、男性の脳では言語は左半球に、空間機能は右半球にはっきり分離している可能性があることが報告されている(山下ら, 1994)。この側成化の性差は、男児の左半球の成熟が女兒に比較して遅く、左右半球の

特殊化が相対的にゆっくりと強く進むことを示しており、結果、男児の言語発達速度は女児に比し穏やかであることが考えられる。

一方、品詞別語彙数に焦点を変え比較すると、男女ともに1歳7か月までは70%以上が名詞であり、1歳8か月以降徐々に名詞の占める割合が減り、他の品詞が表出されるようになる。動詞に関して言えば、1歳9か月までは男女ともに5～10%の横ばいの増加であった。男児と女児で表出語彙数的に差はあるものの品詞別の割合に差はほとんど無かった。性差は語彙数、つまり獲得の速度については認められるが、その品詞構造には認められないことが示唆された。

4. おわりに

本調査では、1歳0か月から1歳11か月の子ども310名の「語彙チェックリスト」のデータ分析を行い、年齢における語彙数の推移の傾向、品詞別語彙数、および性差について検討した。その結果、年齢と語彙数の関係、品詞別語彙数、および性差の3点が明らかになった。

年齢と語彙数は相関が高く、品詞別語彙数では名詞が表出語彙に占める割合が高いという特徴が見出された。性差については1歳代通して女児優位の傾向が認められ、語彙の爆発的増加期以降1歳10か月より女児の語彙数は有意に多かった。一方、品詞別語彙数では性差は認められなかった。

今後、1歳代の各年齢で必要とされる語彙数について個人差を考慮した検討が必要である。また、名詞・動詞以外の品詞構造、さらに品詞の中でも使用頻度の高い語など語彙の出現頻度についての分析を行なう必要がある。それらの結果をふまえ、発達評価の指標となりうる語彙数および品詞別語彙、語彙の使用頻度について検討する必要がある。

V. 文献

- 1) 小林春美, 岩立志津夫 (1997) 子どもたちの言語獲得. 大修館書店. 東京, 85～130
- 2) 福沢周亮 (1973) 幼児の言語. 日本文化科学社, 東京
- 3) 大久保愛 (1984) 幼児言語の研究-構文と語彙-. あゆみ出版, 東京
- 4) 岩淵悦太郎, 村石昭三 (1976) 幼児の用語. 日本放送出版協会
- 5) 柚木馥 (1997) 初語獲得の言語指導. コレール社. 東京, 35～62
- 6) 岩本さき, 笠井新一郎, 荻田知則, ら (2000) 2歳児相談における事前問診語彙チェックリスト作成の試み-1歳11か月から2歳11か月の全使用語彙-. 高知リハビリテーション学院紀要, 2, 23～29
- 7) 小椋たみ子, 錦巻徹 (1998) マッカーサー乳幼児言語発達検査の開発と研究-平成8～年度科学研究費補助金研究成果報告書, 1～66
- 8) Gentner, D. (1982) Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In S. A. Kuczaj (Ed.), *Linguistic development: Vol. 2. Language, thought, and culture*, Pp. 301～334 Hillsdale, NJ: Erlbaum
- 9) 柏木恵子 (1978) 心理用語の基礎知識. 有斐閣ブックス, 東京, 217
- 10) 小椋たみ子 (1999) 初期言語発達と認知発達の関係. 風間書房, 東京
- 11) 塩見将志, 笠井新一郎, 岩本さき, ら (2000) 2歳児相談における事前問診の語彙チェックリスト作成の試み-文法カテゴリーによる分析: 動詞-. 高知リハビリテーション学院紀要. 2, 49～54
- 12) 大石敬子 (2001) ことばの障害の評価と指導. 大修館書店, 東京
- 13) 小山正 (1999) 子どもたちの言語獲得とそれを支える認知発達. 聴覚言語障害, Vol 28 No2, 87～95
- 14) Templin, M. C. (1957) Certain language skills in children. Univ. Minn. Press
- 15) 山下由紀恵, 小椋たみ子, 村瀬俊樹 (1994) 初期言語発達における性差・利き手要因の分析. 鳥根女子短期大学紀要, Vol 2, 49～58
- 16) 山崎京子 (2000) 言語聴覚障害総論Ⅱ. 建帛社, 東京